

令和8年度 英語部会研究計画

I. 研究主題

コミュニケーションを図る資質・能力の育成を目指す授業の創造
～ 外国語教育の動向を踏まえた協働的な授業改革 ～ (3年計画の3年次)

II. 研究目的

○英語学習の目的

外国語の背景文化の理解を深めて相手に配慮しながら、4技能5領域の知識技能を活用して、目的、場面、状況に応じて情報や考えを理解したり、表現したりするコミュニケーションを図る資質・能力を養う。

○外国語教育の動向

- ・育成すべき資質・能力の改訂と評価の3観点の刷新
- ・大学入試や公立高校入試問題の傾向変化
- ・小中にわたる効果的な外国語一貫教育の充実

○社会的な背景

- ・予測困難な Society 5.0 を生き抜く子どもの育成
- ・ICTによる個別最適な学びと協働的な学びの実現

令和8年度

石教研専門部会研究基本姿勢

「手を携え、多様な子どもの成長を支える“協働”研究～自らの人生をしなやかに切り拓き、誰もが幸福を感じられる未来を創造していく石狩の子どものために～」

専門部会テーマ (2年継続研究の2年次)

「取り組むべき視点を明確にした日常実践のさらなる充実」

研究の経過

令和7年度は中学校2学年、小学校1学年の公開授業及びテーマ別学年別分科会による討議、実技・理論研修会(年1回)を実施

研究仮説

- Ⅰ 育成する資質・能力を明確にした言語活動(学習活動)を設定することに加え、ICTを効果的に活用することで、コミュニケーションを図る資質・能力を育成できるだろう。
- Ⅱ 指導と評価の一体化を具現化した授業マネジメントを確立することで、コミュニケーションを図る資質・能力をさらに向上させることができるだろう。
- Ⅲ 小学校外国語教育の実践や、小中一貫教育体制の現状を共有し成果と課題を明確にすることで、小中にわたる外国語教育を充実させることができるだろう。

III. 研究内容

1. 本年度の研究内容(研究課題)

※昨年度より小中両校種共通

- ①研究内容1「資質・能力を育む言語活動(学習活動)の工夫とICTの効果的な活用」
- ②研究内容2「指導と評価の一体化を意識した授業マネジメントの工夫」
- ③研究内容3「小中一貫教育の体制づくり、小中両校種の成果と課題の共有」

2. 研究推進にあたって

上記の通り、英語学習の目的は、「4技能5領域の知識技能を活用して、目的、場面、状況に応じて情報や考えを理解したり、表現したりするコミュニケーションを図る資質・能力を養う」ことにある。現行の学習指導要領となって小学校で6年が経過し、外国語活動や外国語では多くの実践が蓄積されてきた。その中で、目的を達成するためには、小・中にわたる効果的な外国語一貫教育の充実を一層図っていく必要がある。また、これに対する部会員からの要望の声も多い。そこで令和7年度は、副題を「外国語教育の動向を踏まえた協働的な授業改善」とし、次期研究を含めた3年計画の2年目とした。具体的には、研究仮説を焦点化し、校種を超えて、協働的に研究を推進できるように、研究内容を両校種共通とした。令和8年度は、3年計画の3年目とし、さらなる協働研究を推進していく必要がある。

(1) 主題設定の理由

■学習指導要領の改訂

平成29年3月に告示された学習指導要領では、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を育成することを目指す」という目標が掲げられ、5領域の言語活動を通してコミュニケーションを図る資質・能力を育成することとなった。

■小中にわたる外国語教育の充実

小学校3・4年生で年間35単位時間の「外国語活動」、小学校5・6年生で年間70単位時間の「外国語」、中学校では年間140単位時間の「外国語」となった。特に中1の接続で苦慮する現状がある。学習者に寄り添い、切れ目のない接続と緩やかなスモールステップの実現に向けて、7年間の教育課程と具体的な指導内容について小中両校種の教員が理解を深める必要がある。

■外国語科における3観点の理解と授業改善

新しい学習指導要領では、育成すべき資質・能力に沿って、評価の観点が「知識及び技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「主体的に学習に取り組む態度」の3つとなった。つまり従来の外国語科の4観点（知識、技能、表現、関心）の押さえでは、目的を達成できないことを示している。外国語科における3観点についての理解を深め、それらを育成する学習活動（言語活動）を実施する必要がある。

■学習指導要領が定義する学習活動（言語活動）との整合性

学習指導要領が定義する言語活動とは、「具体的な課題を設定し」「目的、場面、状況などを意識して」「実際のコミュニケーションにおいて活用する学習の充実を図ること」とある。加えて、指導計画の作成上の配慮事項ウによれば、「実際に英語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合うなどの言語活動を行う際は、2の(1)に示す言語材料について理解したり練習したりするための指導を必要に応じて行うこと」とある。後者はいわゆるパターンプラクティスやドリル等のことを指すと考えられる。これまでの指導法では、このタイプが多かった。従来の活動のよさも生かしながら、前者のような言語活動の在り方を探る必要がある。

■公立高校入試や大学入試の変革

教育界全体が「予測困難な時代を生き抜く子どもの育成」にシフトしている中、我々部会員の授業改善は待たなしといえる。公立高校入試の英作文では、明確な目的、場面、状況の中で、伝えるべき内容を考える思考力・判断力・表現力と主体的な態度の観点、その英文を正確に書く知識・技能の観点の3観点の力を求められている。この力を授業で身に付けさせるのが、我々のミッションである。

■これまでの成果と課題、今後の方向性

これまでの研究内容では、多様なテーマが網羅されていた。実践発表を通じて様々な視点で自身の指導実践を見直す機会となり、知見を広げることができた。またテーマ設定で悩まないよさもあった。一方で、上記のような新たな学習指導要領の実現を目指すには、焦点がぼやけてしまっていたともいえる。求められる資質・能力の育成において、これまでの学習活動は効果的なのか、何をどう新しくすればいいのかに焦点を当て、部会員の英知から学び合うことが望ましい。

■主題と研究の概要

以上のことから令和8年度は3年計画の3年目（継続研究）とし、これからの時代を生きる児童生徒にとって必要な資質・能力が身に付く実践について、協働的にアイデアを出し合い学び合えることを目的に、「コミュニケーションを図る資質・能力の育成をめざす授業の創造～外国語教育の動向を踏まえた協働的な授業改善～」を主題とした。これらの実現には、以下4点が必要と考える。①②は英語部会役員による情報提供とし、③④を協働研究の中核とした。

①外国語教育を含む教育的動向についての知識理解を深める。

②小中両校種の学習指導要領を理解する。

③学習指導要領に明記された資質・能力の育成を目的に、実践の成果と課題を共有する。

④小中両校種の指導体制を共有し、改善する。

■働き方改革の視点

働き方改革の流れの中では、「絶対にしなければいけないこと」に力を注ぐことが最も効率的だと考える。本年度の研究は、学習指導要領改訂や社会背景に伴う授業改善という王道を目指した。多くの学校の校内研究もこれと深く関係している。また授業マネジメントの中で時間的効率を考えることも効果的と考える。この“協働”研究が各部会員にとって一挙両得の取組となることを願っている。

(2) 基本方針

- ①部会員全員で研究できる共通の研究課題を設定し、部会員全員で研究を交流し研鑽する。
- ②研究課題の究明と部会員の研修活動の強化・充実を目的として、専門部会第二次研究協議会、実技・理論研修会を実施する。実施にあたっては、多くの部会員が参加しやすいように、内容、時期、場所に配慮する。
- ③各市町村の研究団体は地域ごとに連帯し、推進委員を通して管内の共同研究と連携を保ち、主体的な研究を推進する。
- ④小学校外国語（活動）小委員会研修会は、昨年度まで教育課程の成果や課題を共有し、改善すること等を目的として活動していたが、専門部会第二次研究協議会の分科会にて情報共有ができる体制が組まれているため、活動を一時停止する。再開時には部会員に周知する。

IV. 研究方法及び研究体制

部会員は個人・校内及び市町村単位で石教研英語部会が設定した研究課題について、授業実践を通して究明していく。なお、その研究成果や課題の交流は次の方法で行う。

1. 専門部会第二次研究協議会

(1) 概要

- | | |
|------------|---|
| ①授業公開 | 中学校2学年、小学校1学年で3つの公開授業を行う。
事前に指導案検討を行い、当日は課題究明のための討議の材料とする。 |
| ②ワークショップ | 小中合わせて7名の部会員が実践発表を行う。 |
| ③分科会での研究協議 | 研究内容に沿った実践レポートの交流と協議を行う。 |

(2) 部会員はグループA・B・Cのいずれかについてレポートを作成し、分科会で協議、研究する。

＜グループA（研究内容1）＞「資質・能力を育む言語活動（学習活動）の工夫とICTの効果的な活用」

以下2点の実践交流を通じて、主題に迫る。

- ①文法導入や言語活動のアイデア、生成AIの効果的な活用
- ②教科書や副教材の活用アイデア

＜グループB（研究内容2）＞「指導と評価の一体化を意識した授業マネジメントの工夫」

以下2点の実践交流を通じて、主題に迫る。

- ①定期・単元テストおよびパフォーマンステストの評価（ルーブリック等）と教師の仕事術
- ②学習者の主体性を高める単元計画（個別最適・協働的な学び、自己調整、自由進度学習を含む）

＜グループC（研究内容3）＞「小中一貫教育の体制づくり、小中両校種の成果と課題の共有」

以下2点の実践交流を通じて、主題に迫る。

- ①小学校外国語活動（外国語科）の授業づくりアイデア（文法導入、言語活動、文字指導等）、教科書活用
- ②小中のスムーズな接続、小中9年間を見通したカリキュラム

(3) レポート作成に必要な資料の提供

英語部会役員が、レポート作成に必要な以下のような資料を提供し、部会員が明確な見通しをもって協働研究できるようにする。データ共有は、英語部会のGoogleドライブを活用する。

- ・外国語教育に関わる資料（学習指導要領、評価に関する資料や動画、ICTの活用事例集）
- ・レポートの作成例

(4) 分科会のもち方

A～Cのどのグループも小中両校種混合（小学3年生～中学3年生）とする。両校種各学年の実践交流を通じて、7年間を通した指導の在り方について協議し、児童生徒に必要な資質・能力を育成することをねらいとする。

(5) 専門部会第二次研究協議会

令和5年 千歳、令和6年 恵庭、令和7年 北広島、令和8年 江別、令和9年 石狩

2. 実技・理論研修会（サマーセミナー）の開催

英語教育において、その研究と実践に優れた識見、実績をもつ方を講師として招く。研究主題に迫る講演や授業実践の紹介、実技研修、英語教育の今日的な問題提起や解明等の講演内容を通じて、部会員の指導力向上を目的とする。令和6年度より年1回の開催となったため、小中両校種を隔年で実施する。

3. 部会報「石英」の発行

部会及び市町村の研究交流を活発にするために、石教研英語部会情報誌「石英」を年2回発行する。また、個人研究、実践の交流等、日常実践に利用できる資料提供の場としても活用する。

4. 実践資料集の発行

募集した部会員の実践資料を Google ドライブで共有し、活用する。（例 ワークシート、定期テスト問題等）

5. 教育課程の研究

本年度は、小学校も中学校も『教育課程追補編』の実践・検証・整備にあたる。

6. 各種研究会の還流活動

前年度の主な研究会の提言者は、第二次研究協議会において、その内容を他の会員に簡潔に報告する。

7. 中文連事業への協力 English Speech Festival への協力 ※平成25年度から会場が「江別えぼあホール」に固定

(1) 江別からは開催地枠として原則毎年1名を選出。ただし、委員長、副委員長は免除とする。

(2) 江別以外の地区から、毎年2名の担当者を選出。下表を参照。 ※敬称略

	R3	R4	R5	R6	R7	R8 ※4月に決定
江別	○半澤（第一）	○川瀬（江陽）	○戸高（大麻）	○青柳（大麻東）	○深田（第二）	○（ ）
石狩	◎高橋（花川）			○増永（石狩）	◎原田（花川）	
恵庭	○乙川（恵明）	◎乙川（恵明）			○麻生（恵北）	◎（ ）
千歳		○小林（勇舞）	◎小林（勇舞）			○（ ）
北広島			○旗手（西部）	◎旗手（西部）		

(3) 国語科3名、英語科3名の計6名で担当する。

※生体と English Speech Festival 全体の委員長は、年度ごと国語部会と英語部会が交互に担当する。R8は国語部会。

8. 年間の予定

4月 専門部会第一次研究協議会	10月 拡大推進委員研修会 専門部会第二次研究協議会（16日・金）
5月 専門部会役員研修会	11月 第2回専門部会事務局長研修会
6月 第1回 役員研修会	12月 第3回役員研修会
7月 第1回 専門部会事務局長研修会 第2回 役員研修会 第1回 役員・推進委員研修会	1月 第4回役員研修会 第2回役員・推進委員研修会
8月 実技・理論研修会（サマーセミナー）	2月
9月 第3回 役員・推進委員研修会	3月

（文責 美馬 柳太）